

ことこそ、今日いわれている「教育の国際化」の理念にも合致する。その意味で「外国人学校の教育は学習指導要領に準拠していない」ことをもって日本の公教育からの排除を正当化する（文部省などの）見解は、本末転倒である。そのような「教育課程の国家基準」を設定し、教育における文化的・民族的多様性を認めないことの方が誤りなのである。

日本がようやく批准した「子どもの特権条約」は、民族的少数派の子どもがその民族の言語による教育を受け、民族的アンデンティティを保持しうる権利を定めている。現在約九万人の在日朝鮮人の子どもが日本の学校で学んでいるが、その九割までが日本名を名のり自分の民族を隠している。彼らの多くは、卒業・就職のときに「民族の壁」に突き当たり、自己のアイデンティティについて苦悩するという。アイデンティティの喪失は、一九八五年には、日本の高校に通っていた二人の朝鮮高校生を自殺に追い込んだ。こうした悲劇を繰り返させないためにも、民族教育の権利性を承認することが、「権利条約」を批准した日本の責任といえよう。

（なるしまたかし 新潟大学法学部教授）

## 表紙の写真について

妻と孫とつれだって新潟市美術館の「市展」をみにでかけた。展覧会場の写真部門の一つの作品に釘付けになった。

題は「出発」：「たびだち」とよむのだろうか、市役所をたずね、てづるをもとめてやっと作者の後藤近博さん（高校教員）とコンタクトがとれた。

「情報」四〇号の特集、大学入試と新潟県にふさわしい写真をと求めていたこと、二人の女の子の「あった／＼」「はいった」「さあ、またぎのあたらしい自立へのステップがはじまる」そんな喜びと決意がつたわる一瞬を凝縮した表情に感動したことを、ややもすれば重たいテーマの特集の奥にあるのびゆく次の世代へのおとなたちのあたたかいはげまし気持ちもつたわってくることをお伝えして表紙に使わせていたきたい旨もうしあげた。おりかえしの先生からのお手紙はネガをそえてのはげましのお言葉だった。うれしかった。

わたしが大学入学合格の瞬間だともった二人の写真は高校入学合格の場面だった。

編集部はみな大学生になるこどもたちとおもっていた。知的に育ち大人びた表情だったからだろうか。

（編集長・本田敏彦）